12/1 神戸新聞 朝刊 読書面

著者に聞く

高殿円さん

「上流階級」

阪神間の空気漂う外商物語

テレビドラマにもなった小説「トッカン―特別国税徴収官」の著者が、今度は百貨店を舞台に選んだ。

百貨店といっても、庶民には縁遠い外商部。富裕層の顧客を数多く抱える「富久丸百貨店芦屋川店」で、30代後半の女性主人公、鮫島静緒が奮闘する。毎月のノルマは1500万円。女性社員が多い組織の中にあって、男性中心の世界だ。

「外商という存在は知っていても、その仕事はよく分からない。興味を持っている人は多いのではないか、と」

外商員に取材し、百貨店に通って売り場を観察した。作品には神戸や阪神間の山の手の空気が漂う。六麓荘、御影、北野―といった実在の地名も登場し、兵庫の読者には実際の情景が目に浮かぶ。

自身も神戸出身。「子どものころ、百貨店の開店時に店員が並んで迎え入れてくれるのが大好きだった」という。そんな百貨店への愛着と思い出を、主人公に重ねた。

登場する顧客は次々に厳しい注文を突き付ける。世界的に有名なパティシエの創作ケーキ、入手困難な仮面ライダーのベルト…。実際にそんな要望があるのかは分からないが、外商員の苦労が垣間見える。同時に、急死した顧客の葬儀にも深く関わる静緒の仕事ぶりは、客と「外商さん」の関係を超えた人間のつながりを感じさせる。

「外商員はお客さんの長い人生を共に歩んでいく」と高殿さん。その言葉通り、読み進むうちに登場人物の人生が浮かび上がる。

静緒はアルバイトからキャリアを重ね、正社員になったという設定だ。ひょんなことから、同僚の年下男性と芦屋の超高級マンションに住む。

「結婚や出産、仕事で選択を迫られている『アラフォー女子』が、読んで幸せを感じられるような作品を書きたかった」と笑う。高殿さん自身も、まさにその世代だ。

武庫川女子大卒。ライトノベル、漫画の原作などで幅広く活躍する。テーマは「行き当たりばったり。そのときに面白いと思うものが降りてくる感じ」。将来は、洋画の原作になるような作品を書きたいという。

（磯辺康子・社会部）

（「上流階級」は光文社・1680円）

「この作品はアラフォー世代のおとぎ話」と語る高殿円さん＝兵庫県内の自宅

たかどの・まどか 1976年神戸市生まれ。2000年に「マグダミリア三つの星」で第4回角川学園小説大賞奨励賞を受賞し、デビュー。兵庫県在住。